

イケてる PEOPLE

酒どころ伏見から 但馬杜氏の里へ酒蔵を移転

吉村正裕さん
(浜坂町)



京都・伏見の老舗メーカー吉村酒造は、80年受け継いできた酒蔵を解体し、但馬杜氏の里・浜坂町に移転した。この冬から新しい但馬蔵で酒造りが始まっている。酒蔵が杜氏の里へ移転するという前代未聞の試みを実現した吉村正裕さんは吉村酒造の6代目。

「吉村酒造は代々但馬杜氏によって酒を造ってきました。毎年、但馬から伏見まで出稼ぎに来てもらっていたんですが、後継者不足は深刻な問題でした。移転の話が出たのは10年前のこと。4代目源太郎(故人)と5代目源一郎(現社長)、そして私の3人で話し合い、将来にわたって手造りの酒造りをしていくにはこのままではいけない。どうすればいいのかと考えたあげく、こちらから但馬の地に移転して、蔵元自らが杜氏の里で彼らの技を伝承しよう」と決断しました」

しかし、それからが大変だったという。「酒は水が命だ。水の調査を怠るな」と平成9年に亡くなった源太郎さんの遺言を実践すべく、但馬各地の地質・水質・気候・微生物などあらゆる条件を3年かけて調査。その結果、すべての条件を満たす浜坂町を選んだ。しかし、数値では計り知れないのが酒造り。浜坂町の地下水をタンクローリーで伏見の酒蔵まで運び、実際に酒を造ってみたところ、申し分ない酒ができた。そこで、4代目の墓前に但馬の水で仕込んだ酒を供えて、但馬移転を決定し計画を実行した。

「社長である父は頭脳、私はブルドーザー。2人は最良のコンビなんです。どちらが欠けても移転はできなかったでしょうね」と吉村さん。

現在、杜氏・寺谷保さん(温泉町)をはじめとして、但馬の酒造職人は7人。全員がプロとしての自信に満ちた酒造りをおこなっている。

「昔、杜氏たちは酒造りに出たら、親の死に目にも会えないといわれてきました。そのダークなイメージを払拭して、明るい酒造りをめざします。みんな生まれ育った地で、楽しく酒を造る。そして、プロ意識はしっかりともって、伝統技術を活かす」と酒造りの話になると目の輝きが違う。

「但馬の人々に地酒として認められるには最低でも100年はかかるでしょう。自分の代でできるものではありません。自分が飲んでもおいしいと思える酒を造っていくだけです。そして、但馬杜氏のすばらしい技術をたやすく継承していきまます」と力強い言葉。

但馬蔵でつくられる酒「風鶴ふうつる」の名前の由来をたずねると、奥さんの名取名だと答えた吉村さんの少し照れた笑顔が印象的だった。

毎日の暮らしを彩る
「たんぎんマイライフ通帳」
「たんぎんバンクカード」はいかがですか?

たんぎんバンクカードは
デビットカードとしてもご利用いただけます。

地域社会の発展に奉仕する
但馬銀行
本店 豊岡市千代田町1番5号
たんぎんホームページアドレス
<http://www.tajimabank.co.jp/>

但馬に春本番を告げる「お走り祭り」。養父神社の氏子たちが、みこしを担いで大屋川を渡る川渡御が披露される。

お走り祭り 伝説

お走り祭り

4月15日(日)~16日(月)
養父町養父神社から齋神社へ
大屋川を渡るのは15日12時30分ごろ



養父町長野にある齋神社。明治42年に奉納されたお走り祭りの行列を描いた絵馬が残っている。みんなちょんまげ姿である。

昔々、但馬がまだ泥海だったころ、但馬五社(山東町粟鹿神社、養父町養父神社、出石町出石神社、豊岡市小田井神社・絹巻神社)の神様たちが相談して、養父町齋神社の彦狭知命に頼んで、豊岡市瀬戸を切り開いてもらい豊かな大地が生まれました。そこで、養父大明神が代表として、彦狭知命にお礼参りしたことが始まりとされています。また、神功皇后の三韓出征の帰路、養父神社に「葛の葉餅」を献上され、その一部を齋神社にお供えされたという故事にちなんでいるともいわれています。

さらに、前の開拓伝説に加え、この時養父大明神はみたらし淵に泳いでいる「鮭の大王」の背に乗ってこられたとも伝えられています。建屋川にも、昔は鮭が遡上していました。鮭を川の使い、または川にいる神とする信仰は香住町矢田川にもあり、この信仰にお走り祭りが結びつけられたようです。

祭りの朝、「ハットウ、ヨゴザルカ」とかけ声を掛け合いながら、みこしは養父神社を出発。齋神社までの往復40キロの道のりを重さ150キロのみこしを担いでいきます。長い道のりです

が、みこしはまるでスーツと軽く走っていくように見え、とても格好よかったです。みこしを担いでいるのは、みこしを担いでいるのでなく、途中は車で運ばれています。川渡御も今は大屋川1カ所ですが、昔は3カ所もあつたそうです。

みこしは肩に担ぐことが多いですが、養父神社のみこしは腰の位置で担ぎます。みこしを担ぐことは、氏子たちの中で一人前の男として認めってもらう絶好のチャンスでもあります。担ぎ手希望が殺到したといわれています。

養父神社を出発したみこしは、養父町三谷の巖島神社で齋神社のみこしと合流し、練りあつた後、養父町建屋で一泊。齋神社に参った後、再び建屋で二台のみこしは練り合つて別れを惜しみ、それぞれの神社へと帰っていきます。

養父町には「養父男に建屋女」という言葉が残っており、一生懸命みこしを担ぐ養父の男はかっこよく、建屋の女は美人が多く、お走り祭りによって、たくさんさんのロマンスが生まれたらしい。

現在は春の祭りとしておこなわれていますが、もとは12月ひつじの日、帰りは翌日で、古くから「未走りの申戻り」といっていました。ところが、旧暦12月は厳寒のころで、川渡りが大変で



あつたことから、明治10年(1877)に期日変更の問題が論議され、「池山の弁天(現巖島神社)祭りの4月15日の期限がよし」という提案が受け入れられ、今の日程になったということです。また、養父神社から齋神社への道筋も昔は違い、険しい御祓山を登って行ったという記録が残されており、荒行では?という説もあるくらいです。

お走り祭りはいつごろから始まったものなのか、よくわかっていません。どうして川をわざわざ渡り、襦袢を何度も繰り返すのか?ほんとうのところ何の目的の祭りなのか?謎に包まれたお走り祭り。但馬の奇祭といわれる所以でしょう。今年も威勢のよいかけ声と飛び散る水しぶき、大屋川を渡る川渡御が見られることでしょう。

協力:養父町教育委員会

量り売り販売店

- 奥谷商店(香住町) TEL 36-0152
- ナカイストア(豊岡市) TEL 22-3314
- 久保田酒店(豊岡市) TEL 22-3066
- 坂本屋酒店(城崎町) TEL 32-2047
- 酒 楽(養父町) TEL 64-2345
- こめやストア 樽(和田山町) TEL 72-4878

● お酒は20歳になってから
香住酒造有限会社
〒669-6545 兵庫県城崎郡香住町森646-1
<http://www.fukuchiya.co.jp>



● 旬のお酒を蔵元より直送
● 専用タンクで冷蔵保存
美味しさ抜群!
● 専用ビンで500ミリリットル・720ミリリットル・1.8リットルとお好みに
● あなただけの「マイラベル」が作れます。贈り物・お祝いどうぞ。

大評判! 昔なつかしい お酒の量り売り